

認定医紹介（2021年合格）

9月3日、第9回認定医試験が行われ、鵜海敦士先生、野口ゆずる先生、
が新たに認定医となりました。ご紹介させていただきます。

鵜海 敦士先生

研究会のみなさまこんにちは。この度、行動診療科認定医に合格させていただきました鵜海（うかい）と申します。鵜飼さんとよく間違えられるので今回覚えていただければ幸いです。自分の実家は田舎の小さな動物病院で、小さなころから動物と関わる機会が沢山ありました。また、一人っ子ということもあり、犬や猫は自分の大切な相棒となっておりました。いつも「この子たちの気持ちがわかったらいいのになぁ」と子どもながらずっと思っておりました。そんな想いを引きずったまま獣医学生となり、大学三年生のときの入交先生の講義にて行動学と出逢いました。そのとき行動学は自分の長年の夢を叶えられる可能性を示してくれ、また、丁度認定医試験が開始され始めた時期でもあり、自分は認定医の取得を意識し始めました。大学卒業後は、一般臨床疾患との鑑別ができるようになるため、CT・MRIが備わっているなりた犬猫病院（愛知県半田市）に3年間勤務し、そこから現在に至るまで2年半、行動診療科専門病院のぎふ動物行動クリニックに勤めております。認定医となった今でもまだまだ小さいころの夢を叶え切れておりませんが、そこがまた行動学のおもしろいところでもあります。これからは認定医という立場から、日本全体がより動物の気持ちを理解し寄り添える国になれるよう尽力させていただきますので、今後ともよろしく願いいたします。



野口 ゆずる先生

研究会の先生方、こんにちは。この度行動診療科認定医になりました、野口ゆづると申します。千葉県船橋市さきがおか動物病院で勤務医をしています。

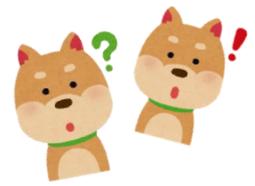
私が大学在学中は行動学の授業はなく、卒業後もさっと保定をして、手早く処置をおこなう...ということが優先されていた時代でした。一般診療を学ぶことに追われる日々の中で少しずつ診察にできるようになると、犬のしつけ方や行動についての質問を受けることも多く、猫派だった私は返答に困っていました。それから柴犬を迎え、犬のトレーニングについて学び、そのまま行動学の世界にどっぷりと浸かることになりました。幸運なことに入交先生のもとで研修医をさせていただきながら、行動診療について学び、現在に至っています。今後ともご家族と動物たちが楽しく助け合いながら生活していくためのお手伝いをしていきたいと思っています。お別れのときに、お互いに笑顔で「出会えてよかった。ありがとう。」と言えるような関係になりますように。

これまでたくさんの方に助けていただきました。今後は行動診療科認定医として行動学の発展のために尽力したいと思っています。私は一つの動物病院で勤務医として一般診療、行動診療、しつけ教室とおこなっており、行動診療をおこなう時間の確保や、症例集めなど、認定医を目指すにあたって難しい部分もありました。同じようにご苦労されている先生方がいらっしゃいましたらぜひお声をかけてください。一緒に頑張りましょう。今後ともどうぞよろしく願いいたします。



合格おめでとうございます。🌟🌟
これからのより一層のご活躍をお祈りしております！

日本獣医動物行動研究会 20周年記念シンポジウム ～ 身体的疾患（器質的疾患）と行動学のかかわり～



11月7日(日)、研究会20周年のシンポジウムがオンラインにて開催されました。配信動画による充実した講義がシンポジウムに先立って公開されたこともあり、シンポジウムへの申込み199名（会員122名、非会員77名）、当日参加者は約150名とオンラインならではの盛況な会となりました。7日のオンラインシンポジウムに参加された先生から、ご感想を頂戴しましたのでご紹介させていただきます

神経科と行動の関わり「行動変化の見極め—どうしている？—（座談会）」を聴講して
（コメンテーター：齋藤弥代子先生・尾形庭子先生・久世明日香先生、司会：内田恵子先生）
感想；石井 綾乃

事前資料の齋藤先生の講義では行動異常を伴う神経疾患の症状について、さらに神経疾患の検査・診断等に関して学ばせて頂き、尾形先生の講義では問題行動に関して身体的疾患が隠れている場合、および身体的疾患を治しても行動学的アプローチを実施しないと問題行動が治らない例を、久世先生の講義では、神経系異常部位と行動変化の関係性などを学ばせて頂きました。

当日のセッションでは、例えば尾追いなどの問題行動を、行動疾患か神経疾患か鑑別するヒントはないものかとディスカッションが盛り上がっていました。好発犬種、発症年齢、そして症状の片側性や規則性の有無も鑑別のヒントとなりますが、神経疾患と行動疾患の併発もありえることから、包括的に疾患を捉えていくことが重要であると再認識しました。

近年、全般性発作に比べて焦点性発作を有する症例では死亡率が高く、その原因として焦点性発作が治療対象とされていない点が指摘されており、一般診療の中で焦点性発作の治療の認識を改める必要性、そして我々行動科の獣医師が神経疾患との鑑別に際し、必要な検査・治療を提案する重要性をより一層感じました。

脳科学には未解明な点が多いですが、今回のセッションのように神経科と行動科の知識・経験を擦り合わせる場が増えると疾患の理解が深まり、よりよい医療が提供できるのではないかと楽しみに思います。最後に、今回のシンポジウムの講師の先生方、企画してくださった皆様に感謝致します。ありがとうございました。

皮膚科と行動の関わり「ネコの皮膚炎—実症例を用いたディスカッション—」を聴講して
（コメンテーター：村山信雄先生・藤井仁美先生、症例提供：和田美帆先生、司会：室井尚子先生）
感想；又吉 亜希子

皮膚科と行動の関わりの実症例を用いたディスカッションは大変勉強になりました。

今回のディスカッションで藤井先生から脳のストレス反応システムについて、子猫の離乳期の過ごし方がその後のストレス耐性に影響があることや、猫の5つの柱についてのバックグラウンドストレスのことなど大切なお話を沢山聞くことができました。皮膚科専門医の村山先生からは、皮膚病を診察するうえで猫の痒みは4つしかないこと、治療を進めても改善が見られない場合には1皮膚病が重度、2食物アレルギーもある3診断が根本的に違う（診断の見直しが必要）と考えるという診療の進め方・考え方を学ぶことができました。

猫の皮膚を舐める行動は痒みが先か？常同行動として舐めているのか？この点は難しいところではありますが、心と体は表裏一体であるということ、それは同時に存在しているともいえると思う

ので、行動学的側面や皮膚科学的側面、また別の多角的方面から複合的に診ることが必要だと改めて思いました。それを意識して、そしてそのような目で診られるように日頃の診療に生かしたいと思えます。

事前事後配信講義動画があるおかげで、予習復習振り返りを行うことができること、また本来ならば対面で行うことが良いのかもかもしれませんが、オンラインという形で参加しやすさも大変よかったですと感じました。

動画配信セミナーを行っていただいた諸先生方、そしてシンポジウムを開催するにあたって事前準備、当日の進行、そして懇親会と企画をしてくださった先生方々に感謝申し上げます。大変有意義なシンポジウムでした。このような機会を作っていただきましてありがとうございました。



行動と予防医療「事前セミナーに関する質疑応答」を聴講して
(コメンテーター：南佳子先生・菊池亜都子先生、司会：白井春佳先生)
感想：中野 あや

南先生の「身体疾患による行動の変化」の講義動画に寄せられた質問への回答に始まり、話は動画でも触れられていた他科との連携の重要さへと広がりました。大学病院や大規模病院であれば病院内で他科の診察や検査を受けられますが、個人で行動診療をおこなっている場合には地域の先生とどれだけ連携できるかが大切になります。他科の先生と連携しやすい土台を作るためにも行動診療科の存在意義が一般臨床の先生にもより一層浸透するよう、自分にできることは何だろうと考えました。コロナ禍では飲み会で繋がるのも難しいので(そもそも育児で飲み会に行けません)、他科の先生も一堂に会するような学会や症例検討会での発表や質問を頑張ることも、その一助になるのではないかと思います。

続いて、往診タイプの診療でどこまで身体検査

をするか、という質問について、菊池先生と白井先生のご経験から往診時の安全確保、「絶対に咬まれてはいけない！」の話題になり、私自身も往診しているためウンウンと頷きながら聴かせて頂きました。私は、診療でお伺いする際には事前に必ずリード着用などの管理を伝えるようにしていますが、攻撃行動の相談や大型犬のケースでは飼主が厳重に管理していることが多く、むしろ「攻撃行動はないです」と言う飼主がフリーにした小型犬にカプリとされることにヒヤヒヤします。

「獣医師は咬まれてはいけない」というのを私も学生時代に教わりましたが、コメンテーターの先生方の楽しいムードの中で改めて意識させて頂きました。最後に、素晴らしいシンポジウムをありがとうございました。シンポジウムに関わられた先生方に心より感謝致します。

ハズバンドリートレーニング「ハズバンドリートレーニングの実践(座談会)」を聴講して
(コメンテーター：青木愛弓先生・村田香織先生、司会：近藤悦子先生)
感想：小田 寿美子

私は今まで、ハズバンドリートレーニングとは、こちらの意思を伝えることが困難な動物園動物や水族館動物相手のもので、自分には関わりがないと勝手に思い込んでいました。小動物臨床は動物が恐怖心から怖くて固まってくれることを利用して診療を行うもの、喜んで診療を受けてくれる犬猫はほんの一部という認識が青木先生のセミナーを聴講して180°転換されました。

待合室で開催していたパピーパーティーも、コロナ禍以降、開催場所のスペースの都合上、密を防ぎきれないため実施が困難となり、今後の子犬子猫への対応として、おやつ外来を考え始めたところで、沢山のヒントを得ることができました。子供のかかりつけの小児科では予防接種後に子供にシールを、病気で受診時には薬局でキャラクターもののポケットティッシュをもらえます。それをヒントに、当院でもワクチン証明書におやつとパンフレットをつけて渡し、おやつ持ち込みも、気軽に立ち寄りOKを告知し始めたところです。いざれお誕生日検診もぜひやってみたいです。

私の勤務先に併設されたトリミングサロンでは、トリマーさんが犬と仲良くなって、楽しくトリミングを行っています。もちろん、二人がかりでなんとかシャンプーできる柴犬や、怒るのをなだめながら、あるいは口輪をしてトリミングする小型犬もいますが、保定という観念のない姿勢は見習うべきところがたくさんあります。行動診療を受診した、攻撃性のある症例のトリミングもトリマーさんと協力しながら行い、日々情報の共有をしています。

動物病院の診療では、動物にとって嫌なこともするため、なかなかトリミングのように、とまではないかもしれないかもしれませんが、理論を理解したうえで基本的なことから開始する、練習と本番は別というメッセージを忘れずに、明日からの診療に生かしたいと思います。

今回のシンポジウムは本当に興味深いテーマばかりで、充実した1日を過ごすことができました。開催に関わった諸先生方に心からお礼を申し上げます。

事前・事後配信として以下の充実した講義動画が配信されました [配信期間：10/1(金)～11/30(火)]

【配信内容一覧】

- 『行動学の先生のための神経疾患 区別のポイントと診断へのアプローチ』
齋藤弥代子先生(獣医神経科専門医)
- 『臨床現場における行動疾患と神経疾患』 尾形庭子先生
- 『神経学的疾患と行動学的問題の関連』 久世明香先生
- 『猫の皮膚炎～どう診断するの～』 村山信雄先生(アジア獣医皮膚科専門医)
- 『猫の健康で快適な環境のためのガイドライン～5つの柱～』 藤井仁美先生
- 皮膚科ディスクッションの症例抄録(PDFファイル)
- 『身体疾患による行動の変化』 南佳子先生
- 『動物病院で使えるハズバンドリートレーニング』
青木愛弓先生(「動物の行動コンサルタント」あゆみラボ代表)



会員の窓

今回は前回ご執筆いただいた堂山先生からご紹介いただき、茂木千恵先生にご執筆いただきました！



皆さん、こんにちは。私は東京都八王子市にあるヤマザキ動物看護大学の教員として、専門分野である行動学の講義や卒業研究に取り組む4年次生の指導を行っています。行動学の講義は2年次生の必修科目となっております。1学年200名強の学生さんを相手に行動学研究の4分野からアニマルウェルフェアをめぐる5つの自由などの概念的な内容から始まって、犬の攻撃行動や猫の不適切な排泄への行動治療法といった結構コアな内容まで盛り込んで90分を15コマ実施しています。着任してから7年が経過し、ようやく講義にも慣れてきました。学生さんたちの多くは動物看護師になることを将来の目標にしていることもあり、問題行動の取り扱いや予防方法についての講義ではとても熱心な質問が挙がってきます。約半数は自分の飼っている犬と猫の問題行動について質問してくるか、「今日習ったことをうちでもやってみようと思います」といった感想です。犬や猫を飼ったことがない学生さんが2割くらいいますが、飼えない家庭事情だからこそ好きな犬と猫に関われる職に就きたいと考えているようです。学生さんの多くは心から動物のことが好きで、動物を救いたいと考えてこの分野に進んできているようです。動物看護師の仕事は動物病院で診療の補助を行うだけでなく、待合室での予診や食餌指導、

さらには飼い主さんの心のケアまでとても広いものが求められるようになってきました。それらに応えられるようなスキルと知識があればとてもやりがいのある職種となると考えています。そのため学生さんたちにはしっかりと知識を持って現場に立つことで自信を持って説得力のある対応ができるようになるのだからと励ます日々です。卒業研究のテーマとして自分が飼っている犬や猫の行動治療を実施し、その手法と効果についてまとめるという学生さんもいますが、たいへん丁寧な取り組みが多く、立場は指導する側ではありますが、私が勉強させてもらうことも少なくありません。

来年度からは国家資格となる愛玩動物看護師資格の取得を目指したカリキュラムが始まります。ひとりでも多くの学生さんが自分に自信を持って社会貢献できる人材へと成長できるよう、私自身も学びを継続していかねばと身の引き締まる思いです。私にとって獣医行動研究会はその具体的な学びの場として最高の位置づけです。今後は獣医行動研究会のますますの発展のため甚だ微力ではございますが一層の努力を尽くしたいと思っています。もし問題行動に関する研究のアイデア等をお持ちでしたら是非お気軽にご相談ください。皆様からのご連絡をお待ちしております。

茂木先生ありがとうございました。

次回はどなたにバトンが渡るでしょうか。ご自身のところに回ってきた際にはぜひ快くお引き受けください。

事務局からのお知らせ (内田 恵子)



今年は新しい幹事メンバーを迎え新体制で様々なイベントがありました。どれをとっても充実した内容で、多くの先生が受講され、最新の行動学的思考がより良い形で臨床に広がっていると確信しています。研究会は会員数が増えており、共に勉強をしようとする先生が増えていることは大変嬉しいことです。小動物臨床において動物行動学的知識が広がり、心身共に健康な動物たちが増えることを願っています。

年末年始と臨床は忙しい時期を迎えます。皆様どうぞご自愛ください。

ご意見・ご感想ありましたら consultation@vbm.sakura.ne.jp までお寄せください。最後まで読んでいただき、ありがとうございました！



ニュースレター No. 20
発行者 日本獣医動物行動研究会
広報委員会 編集・デザイン 北村優